3　寄安（よりやす）・栗森（くりもりいせき）遺跡

所 在 地：坂井市春江町寄安

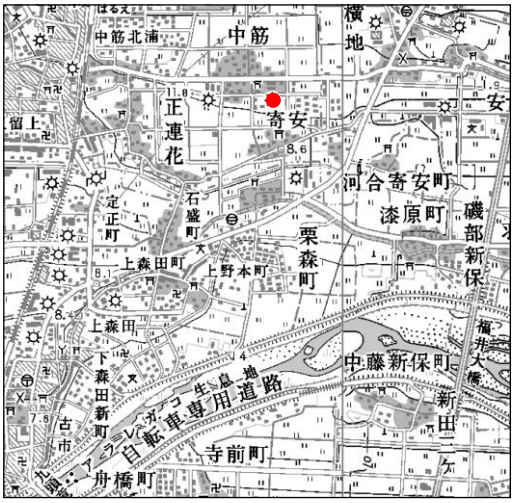
調査原因：一般県道福井森田丸岡線道路改良事業

調査期間：令和３年５月～６月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：100 ㎡

時　　代：弥生時代後期～中世、近世



位置図（S=1/50,000）

遺跡について　寄安・栗森遺跡は、福井平野中央部にあり、遺跡の範囲は、坂井市春江町寄安から福井市栗森町まで広がっています。今回の調査箇所は、その北東部にあたります。平成 26 年度の北陸新幹線建設に伴う調査では、福井市と坂井市の市境付近で旧河川が確認され、付近には小字「芳ノ川（よしのがわ）」が地名として残っています。このことから、今回の調査地は、磯部川と「芳ノ川」に挟まれた位置であったと考えられます。

本年度の調査地の地名は、小字「古屋敷（ふるやしき）」であり、真宗道場が開かれていたという伝承が残っている場所です。調査地西方には市指定史跡「黄楊堂（つげのどう）」があり、この場所には親鸞上人が逗留（とうりゅう）したと伝えられています。また、調査箇所付近を北陸道が通過し、往時には多くの人々が行き交っていた場所であったと想定できます。

寄安・栗森遺跡は、県埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文と略す）や福井市教育委員会により、過去に何度も調査が行われています。主に弥生時代後期から古墳時代前期の集落や水田、鎌倉時代から江戸時代の集落などが確認されています。

一方で、近年（平成 28 年、令和元年度）に県埋文が実施した本年度調査区と隣接する箇所の調査では、これまでの調査とは違い、遺構が密集して確認できました。鎌倉時代から室町時代の区画溝を伴う掘立柱（ほったてばしら）建物群や井戸などがみつかっており（図１）、長期間におよぶ屋敷地が存在したことが明らかになりました。出土遺物は、越前焼や土師質（はじしつ）皿、漆器椀（しっきわん）、箸（はし）など日常的に使用するものが主体的でしたが、宝篋印塔（ほうきょういんとう）や五輪塔（ごりんとう）も出土し、一部を墓域として使用してのかもしれません。

主な遺構・遺物　平成 28 年度に調査した屋敷地の南方は、低地であり、湿潤な土地でした。今回の調査でも同様な地形を確認できたため、低地部の埋没時期を確認しました。その結果、この低地は、弥生時代後期以降に埋まり始め、屋敷地が営まれていた時期(13 世紀後半から 15 世紀前半)には、植物を多く含む黒色の粘土層が認められ、池沼化(ちしょうか)していたことが分かりました。この堆積層からは越前焼や土師質皿を主体として、青磁(せいじ)・瀬戸美濃焼(せとみのやき)・石製バンドコなども出土しています（写真３）。出土した土器は、摩滅していないことから、近くから流れ込んだものと考えられます。また、時期を決めることができませんでしたが、植物を含む黒色の粘土層を切って構築された柱穴(ちゅうけつ)５基、土坑(どこう)２基もみつかりました。　（三原翔吾）

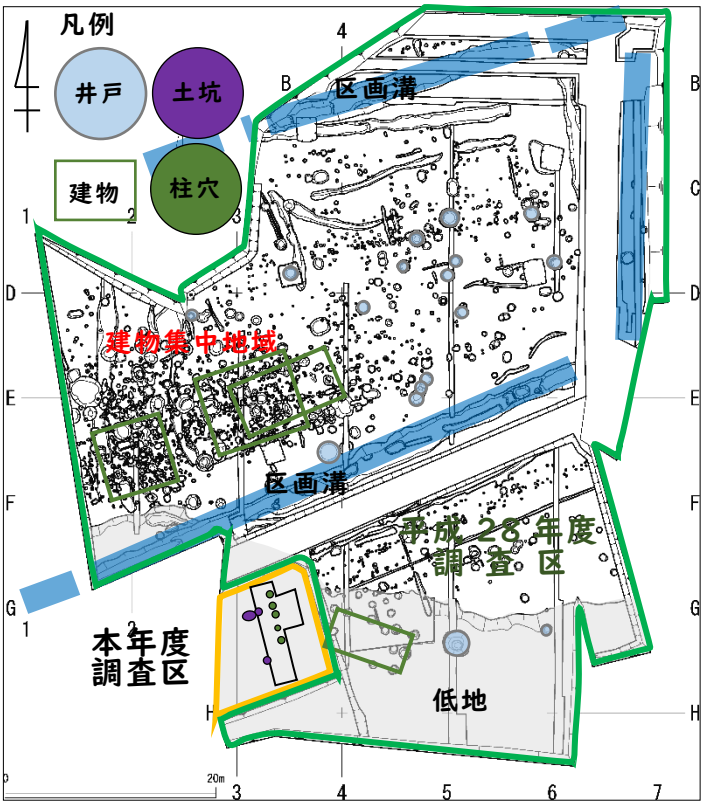


図１　令和３年度・平成 28 年度調査区全体図

写真１　低地の土層堆積

写真２　礎板の残る柱穴

写真３　出土遺物